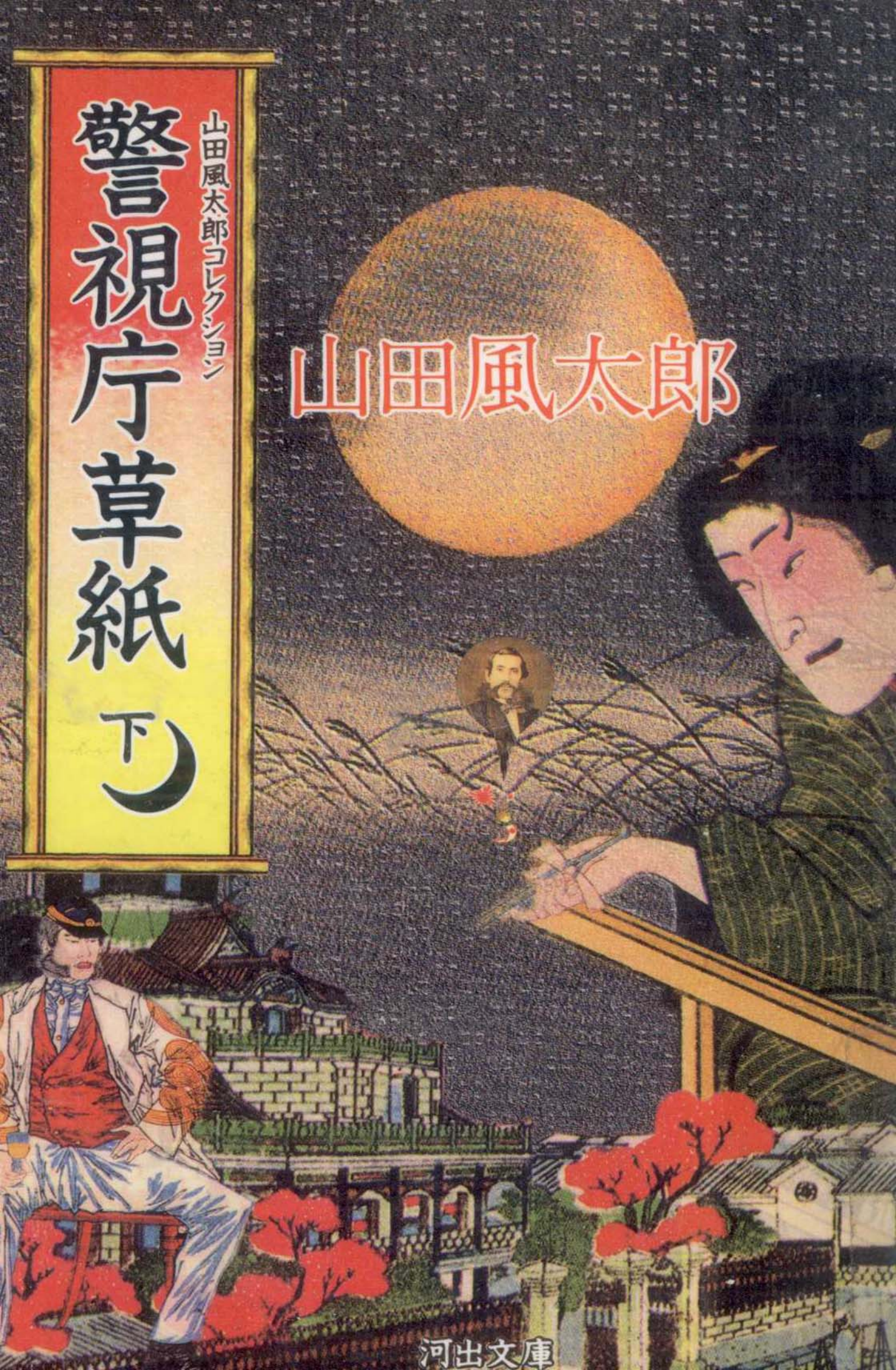
山田風太郎コレクション

警視庁草紙 下

山田風太郎



河出文庫

山田風太郎コレクション
警視庁草紙 下
◈
著者 山田風太郎

一九九四年二月二五日 初版印刷
一九九四年三月 四 日 初版発行

発行者 清水勝
発行所 河出書房新社
〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷二-三二-二
☎〇三-三四〇四-八六一一（編集）
〇三-三四〇四-一二〇一（営業）
振替口座（東京）〇-一〇八〇二

デザイン 粟津潔

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。
©1994 Printed in Japan
ISBN4-309-40412-X

山田風太郎コレクション

警視庁草紙 下

山田風太郎

目次

警視庁草紙　下

痴女の用心棒　7
春愁　雁のゆくえ　63
天皇お庭番　115
妖恋高橋お伝　173
東京神風連　218
吉五郎流恨録　265
皇女の駅馬車　309
川路大警視　354
泣く子も黙る抜刀隊　406
解説――関川夏央　461

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

警視庁草紙　下

痴女の用心棒

一

明治八年七月十三日の日暮れがたであった。西日比谷の司法省の裏門から、トボトボと一人の女が出ていった。

洗いざらしの浴衣のような灰色の着物に細い帯をしめ、素足に藁草履をはいて、髪は背に長くばさと垂れたままだ。それだけで幽霊か狂女としか見えないが、さらにその女は蠟色の肌をして、眼はうつろにひらき、足は雲を踏んでいるようであった。

道ゆく人々は、これとゆき逢うと、みんな眼を大きく見ひらいてふり返る。

それは女のみなりや歩きかたに異常なものを認めたせいだけではなかった。そんな異常なみなりや歩きかたにもかかわらず、彼女のけたはずれの美貌が人々の眼を奪ったからであった。

女の門を出てゆくのを、司法省の裏手の一室から窓越しに見送って、加治木警部は油戸杖五郎巡査に命じた。

「油戸巡査、あれを追跡してくれんか」

「追跡？　無罪放免になった女を、でありますか」
「うむ。……」
加治木警部はしばらく考えていて、
「あれが帰るさきはわかっちょる。神田鍋町で傘屋をしとる親元のところじゃろ」
と、つぶやいた。
「じゃから、追跡っちゅうのは、きょうのあれのゆきさきじゃなか。これからさき、ずっとあの女の監視を頼みたいんじゃ」
「なんのために監視するのでござりますか」
「あれは無罪っちゅうことになったが、広沢参議暗殺の下手人はまだつかまらん」
「すると、やっぱり、あの女が……」
「うんにゃ、あれが事件に無関係であったことはまちがいなかろう。そうでなけりゃ、頭に霞のかかったようなあの女が、四年以上も知らぬ存ぜぬで通せたわけはなか。……そいはともあれ、下手人は今なおこの世のどこかにおる。広沢参議を殺害し、そのあとあの女を犯したやつ、少くとも二人か三人が」
「はあ」
「そやつらが、あの女が世の中へ出て来たと知ったらどうするか。女はいままで、どげなことを裁判所でしゃべったか、それを探りたくて、何くわぬ顔で近づいて来やせんか。……」
「なるほど」
と、いったが大男の油戸巡査は、自信のない表情をした。

「しかし、私は女の見張りは苦手でありますなあ。……しかも、見張っておることを、それら下手人に感づかれてはならんのでござりましょう」
「いや、感づかれて結構、それがむしろこっちの狙いじゃ。女になお警察が執拗にくっついちょると知りゃ、下手人どもはいよいよ気にかかって、女から眼が離せまいが。……ひょっとすると、こんどは女に魔手をのばして来るかも知れん」
「おう。……それは、そういうこともあり得ますな」
「事実あの女は、これから日々暮してゆくうちに、何かのはずみで何かを思い出して、知人に何をしゃべるか知れたもんじゃなか。その聞き込みと、女につきまとう怪しげなやつの捕捉。……その二つの目的のための追跡じゃ」
加治木警部は油戸杖五郎巡査の肩をたたいた。
「おはん、いろいろ働いて、まだ巡査とはいかにも不遇じゃ。が、広沢参議の暗殺は、明治はじまって以来最大の謎、下手人をとらえろという詔書まで賜わりながら、四年を経てついに迷宮にはいらんとしとる。少くとも警視庁にとって最大の失態じゃ。……そいつをつかまえりゃ、おはん、警部に昇進するどころじゃすまんかも知れんぞ」
油戸杖五郎の眼はらんとかがやいた。
「やります。拙者、あの女にくいつきます！」

数日後、どことも知れぬ闇の中の声。
「広沢参議の妾が無罪放免になったことは知っておるな」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「知っております」
「いま、どこにおるか知っておるか」
「神田鍋町二十七番地、親元たる傘屋福井長吉方に暮しております。……そのうち、何とか近づいて探りをいれて見ようと思っておりました」
「危いことをするな。……女に、顔を見られたら何とする」
「あの女が、おぼえているでしょうか」
「ヒョイと思い出すということがある。いや、そのおそれは充分ある」
「すこし薄馬鹿の女でございますが」
「それにしても、血みどろの中で自分を犯した男どもの顔ではないか」
二人だけの問答ではない。最初にいい出した横柄な声は一つだが、それに対する声は複数だ。
「やはり見捨ててはおけぬ。あの女に、警視庁がなおまつわりついておるのを知っておるか」
「へ？　警視庁が、放免した女をまだ？　なぜ？」
「あの女が、世の中に出て、何をしゃべるかと壁に耳をあてて待っておるんじゃ」
「そ、それは。――」
「放任は出来ん。あの女を見張れ。……警視庁の犬に気どられてはならんが……事と次第では、女を永遠に黙らせたほうが安心ということになるかも知れぬ。今さらの愚痴ではないが、あのときうぬらがあの女に淫心を発して、始末しておかなかったのがこの面倒のもととなっ

たのじゃ」
「いえ……あの場合、女を輪姦すれば、暗殺の下手人について、警察の眼がくらまされるだろう、とも思い――」
「たわけめ、もともと女色のために職をけがしたうぬらではないか、もっともらしいこじつけはよせ！」
声は舌打ちにつづいて、戦慄のひびきを帯びた。
「とにかく、あの事件の下手人が白日の下に明らかとなったら、とり返しのつかぬ天下の大事となるぞ」

二

油戸杖五郎巡査がふるいたったのもむりはない。それは加治木警部のいったように、明治初年最大の謎の事件であった。
それどころか、幕末以来、後年の昭和時代に至るまで、歴史的な大物の暗殺でありながらついに犯人が不明のままであるという点で――姉小路公知（きんとも）卿とか坂本竜馬とかの下手人はおぼろげながら浮かんでいるけれど、これはまったく濛々たる暗霧の中に消えてしまったという点で、最大の迷宮事件といっていい。
参議広沢真臣（さねおみ）が暗殺されたのは、四年半前の明治四年一月九日の未明であった。時に年三十九歳である。
三十九歳で殺されたから明治の元勲とはならなかったが、生きていれば維新の俊傑ベス

ト・テンには充分はいる人物であったろう。殺された時点においても、薩摩における西郷・大久保に対して、長州における木戸・広沢とならび称される存在であった。彼は軀幹魁偉・槍術の達人といわれ、それより政務に関して示した重厚果断の性格は大久保に似て、ややもすれば感情的な木戸より重んじられたくらいである。

さて、この広沢が殺されたのは、麹町富士見町二丁目の自邸で、愛妾おかねと同衾して眠っているところを襲撃者に踏み込まれ、十五カ所に及ぶ乱刃の下に殺害された。

おかねもまた傷を受けた。これまた眠っていて右横鬢を切られたのだが、これはそれだけで殺されるのは免れた。

とにかく彼女は目撃者なのだから、当局の烈しい訊問を受けたのは当然である。それに対して、おかねの供述は実にあいまいなものであった。熟睡中、いきなり切りつけられたのでそのまま喪神し、何が何だかわからないというのである。下手人たちの人相風態も五里霧中だが、ただそれが複数であったことだけはおぼえていた。

果然、庭から縁側にかけて、素足、足袋、麻裏と数種の足跡が残り、犯人たちがそっと雨戸をあけて侵入したのち、不敵にも座敷の外から中をのぞいていたらしい数個の穴が障子に認められた。室内に洋燈はともっていたのである。

土足の跡は、隣家の木戸孝允邸との境の塀の上にも見られた。それで凶行者たちは木戸邸をも襲おうとしたが、当時木戸は大久保とともに長州へ、旧臘から西下していたので、そのことに気づいて、そちらは中止したものと判断された。

さて、この犯人たちがわからない。

何も盗られた物はなく、ただめざす広沢だけをしとめて――妾のおかねも右鬢に傷を受けたのだが、その傷のようすから見て、それは顔をならべて同衾していたため、広沢を斬った刀のきっさきが掠めたものらしい――魔風のごとく立ち去ったところから見て、反広沢、反長州、反政府のいずれかの思想による政治的暗殺にちがいないと考えられた。

まず眼をつけられたのは、政府顚覆を計ったとして旧臘二十八日に斬罪に処せられた元米沢藩士雲井龍雄の残党である。次に嫌疑を向けられたのは、やはり反政府党としてすでに捕縛されていた元肥後藩士河上彦斎の一味である。さらに長州の叛乱者大楽源太郎の筋、熱狂的な攘夷論者丸山作楽の筋――と、数百人の不穏な人間が検挙され、虱つぶしに凄じい追及を受けたが、しかしその結果はいずれもシロであった。

三月二十五日にはついに詔書が出た。

「故参議広沢真臣の変にあうや、朕すでに大臣を保庇すること能わずその賊を逃逸す。……朕甚だこれを憾む。それ天下に令し、厳に捜索せしめ、賊を必獲に期せよ」

にもかかわらず、依然として下手人は不明であった。

そのうちに、妙な流言がささやかれ出した。その一つは、「黒い手は薩摩だ。意のままにならぬ長閥の巨頭を持て余した大久保がこの際始末したのだ」という説で、もう一つは、「いや、そうではない。同じ長州出だが、広沢といまやその主導権を争っている木戸の手が動いたのだ」という説である。

とくに後者に至っては盟友の仲だけに非常識としかいいようがないが、それだけにかえってぶきみな説得性があった。同じ長州の前原一誠が、広沢の横死の報を聞くやたちまち、

「木戸にやられたな」とさけんだという噂がそれに塗り重ねられた。
もっとも司法当局は、そんな妖説にはとり合わなかった。事件当時、大久保も木戸も長州にいたのだし――まさかその両人がみずから手を下すなどということはあり得ないにしろ――まだ天下が鳴動しているさなかに、新政府の実力者をみずから消去するような愚劣な小人であろうはずがない。
当時は警視庁はまだ存在せず、刑部省弾正台というのが捜査にあたっていたのだが、窮したあまりに、また広沢の妾に眼をもどした。
なにしろこの女が唯一の犯人の目撃者なのだから無理もないが――再追及の結果、とんでもない事実が続々と現われてきた。
まず当夜、広沢が殺されたあと、彼女が下手人たちに犯されたということ、次に広沢家の用人の起田正一という男や、同居している広沢の甥とも以前から情交があったということ、さらにふだんから広沢家に出入りしている甥の仲間の若者たちとも関係していたということ。
――
「な、なんじゃと？」
検察官たちは呆れ返った。
「うぬは、天下の広沢参議の御寵愛を受けながら。……」
改めて、しげしげと眺めて、彼らは、金槌みたいな頭の隅っこで、なるほどこれでは、この女を見た男はだれでも変な気を起すのも道理だ、と認めた。
事件の起ったとき、おかねは二十一であった。どちらかといえば小柄で、外見は細腰に見

えるが、その実肉づきはいい。すべっこい真っ白な肉がこのごろ渡来の腸詰みたいにくびれてつながっているようで、曲線は柔媚をきわめている。顔は可愛いのに、からだは怖ろしく肉感的であった。

しかし、むろん同感はしていられない。――はじめ、てっきり政敵の魔手だと見ていたが、そういう刺客が目的達成後、みんな寄ってたかってこの女を犯したというのも、考えて見ればおかしい。

痴情の果ての殺人という可能性も充分あり得ると知って、用人の起田をはじめ、おかねと関係した若者たちが一斉に捕えられた。実際にまたおかねが、「あの夜」のことについて責められるにつれて、それらの男たちの名を口にしたのである。

しかし、男たちはみな犯行を否定した。

「そのような関係となりましたのは、まことに恐れいったことでございます」

彼らは密通という事実では全面的に服罪しながら、

「どういうわけか、あの女と話していると、そういうことにならずにはいられないのです。そして、恐ろしいことだ、と思いながら、繰返さずにはいられなかったのでございます」

と、魔法にかかったようなことをいい、

「とにかく、求めればいつでも応じてくれますのに、何も参議さまを手にかけるなどという身の毛もよだつようなことをするわけがございません」

と、変に合理的なことを、必死の顔で述べるのであった。

用人の分際で何たるけしからぬ所業かと叱咤された起田に至っては、おかねが甥御さまを

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com